

日本は、京都議定書を捨ててしまうのか？

「世界全体の排出削減に向けて、京都議定書から、全ての国が効果的に参加し対策を行う新しい枠組へと移行していくことが不可欠である。」という、昨日の気候変動枠組条約第 13 回締約国会議（COP）での日本政府の発言は、一体どういう意味なのか？

京都議定書を生み出した日本は、その議定書採択 10 周年にあたる今、京都議定書を捨ててしまおうというのだろうか？先進国の更なる排出削減や、途上国へのエネルギー効率の良いクリーンな技術拡大を京都議定書のうえに積み上げていくことが必要であるのに、日本は、全てのプロセスを一番最初からやりはじめようというのか？

また、ECOは、ボトムアップベースのセクター別アプローチ、市場ベースのアプローチ、そして、官民のパートナーシップなどが明記されている日本が（読み上げた）対策リストに足りないものがあることも問題と考えている。京都議定書の心臓（ハート）ともいえる法的拘束力のある排出削減目標はどこへ行ってしまったのか？

日本は、気候変動問題を解決するために必要な法的拘束力のある絶対量による排出削減目標ではなくて、昔からお気に入りの各国がそれぞれの目標を自主的に掲げられる「ブレッジ アンド レビュー」提案に戻ろうとしているのか？

ECOは、日本に対し、今すぐ、自分たちのポジションの明確な説明と、世界に向かって今すぐ自分たちが京都議定書を見捨てようとしていないことを示すことを要請する。事実、日本は、2020 年の先進国の排出削減目標における自国の数値目標を提案する時期にきているのだ。